

目次

第16講	助詞(1)	……	62
第15講	長文問題演習(3)	第11講～第14講	58
第14講	助動詞総合	……	54
第13講	助動詞(7)	……	50
第12講	助動詞(6)	……	46
第11講	助動詞(5)	……	42
第10講	長文問題演習(2)	第6講～第9講	38
第9講	助動詞(4)	……	34
第8講	助動詞(3)	……	30
第7講	助動詞(2)	……	26
第6講	助動詞(1)	……	22
第5講	長文問題演習(1)	第1講～第4講	18
第4講	形容詞・形容動詞・係り結び	……	14
第3講	動詞(2)	……	10
第2講	動詞(1)	……	6
第1講	古文とは	……	2
第17講	助詞(2)	……	66
第18講	副詞の呼応	……	70
第19講	長文問題演習(4)	第16講～第18講	74
第20講	紛らわしい語の識別(1)	……	78
第21講	紛らわしい語の識別(2)	……	82
第22講	長文問題演習(5)	第20講・第21講	86
第23講	敬語(1)	……	90
第24講	敬語(2)	……	94
第25講	敬語(3)	……	98
第26講	敬語総合	……	102
第27講	和歌の修辞	……	106
第28講	長文問題演習(6)	第23講～第27講	110
第29講	古典文法総合(1)	……	114
第30講	古典文法総合(2)	……	118
入試問題演習①～③	……	……	122
付録―文語文法要覧	……	……	134

第11講 助動詞 (5)

基本事項

1 〈推定〉の助動詞「なり」

【活用】 ラ変型

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
なり	○	なり	なり	なる	なれ	○

【接続】 終止形接続（ラ変型活用語には連体形）

【意味】 a 〈伝聞〉「〜ソウダ・〜トイウ」

b 〈推定〉「〜ヨウダ」

「なり」は、「鳴あり」あるいは「音あり」が変化してできた語といわれており、〈聴覚〉を元にして推定するのが原義の助動詞である。ひとまとめに「伝聞・推定の助動詞」とされることが多いが、厳密には、その推定の根拠である情報が、「人の話」であるときは〈伝聞〉、「単なる音声」であるときは〈推定〉のように文法的意味は区別される。

2 〈推定・婉曲〉の助動詞「めり」

【活用】 ラ変型

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
めり	○	(めり)	めり	める	めれ	○

【接続】 終止形接続（ラ変型活用語には連体形）

【意味】 a 〈推定〉「〜ヨウダ」

b 〈婉曲〉「〜ヨウダ」

「めり」は、「見あり」あるいは「見えあり」が変化してできた語といわれており、「なり」とは対照的に〈視覚〉を元にして推定するのが原義の助動

詞である。また、「らし」との対比で言うと、「らし」が根拠のある推定であるのに対し、「めり」は主観的な推定であるといえる。

「婉曲」は、事実を断定的に述べるのを避け、表現をやわらげる用法である。

3 「なり」「めり」「べし」と撥音便

「なり」（伝聞・推定）、「めり」・「べし」の三つの助動詞が、「ある」などのラ変型活用語に接続すると、その「る」が撥音便化して「ん」と発音されることがある。しかし、平安時代初期までは「ん」は表記されることがほとんどなかったため、「撥音便無表記」という現象が起きることになる（平安時代中期以降は「ん」も表記されるようになる）。

（例）「あるめり」↓「あんめり」↓「あめり」

4 〈断定〉の助動詞「なり」「たり」

【活用】「なり」⇨形容動詞型（ナリ活用）、「たり」⇨形容動詞型（タリ活用）

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
なり	なら	なり	なり	なる	なれ	(なり)
たり	たら	たり	たり	たる	たれ	(たれ)

【接続】 「なり」⇨体言接続、活用語の連体形

「たり」⇨体言接続

【意味】 a 〈断定〉「〜デアル」

b 〈存在〉「〜ニアル・〜ニイル」（「なり」のみの用法）

「なり」は「にあり」が、「たり」は「とあり」がつづまってできた語といわれている。よって、「に・あり」「と・あり」のように元の形に分裂した形で使われることも多い（連用形「に・と」の用法）。

1 () 内の助動詞を、適切な形に活用させよ。

- (1) 萱草くわんさうといふ草こそ、忘れ草とて、それを見る人、思ひをば忘る(なり)。
- (2) 此一門このにあらざらむ人は、皆人非人みなにんびにん(なり)べし。
- (3) 風のみこそ人に心はつく(めり)。
- (4) 冬(なり)ど、帷子かたびらをなむ着たりける。

2 次の文中から、助動詞「なり」「たり」「断定」をそのまま単語の形で抜き出し、ここでの活用形を答えよ。

- (1) 男もすなる日記にきといふものを、女もしてみむ、とて、するなり。
- (2) 来るをことすれば、さななりと人々いでて見るに、
- (3) 上にさかふること、豈人臣あにじんしんの礼たらんや。
- (4) 月の宮古の人にて父母あり。

3 傍線部を、音便を使わない形で書き改めよ。

- (1) 海賊は夜歩よあしきせざなり。
- (2) 「誰も見たことがないというその骨は」さては扇あふにはあらで、海月くらげのななり

1

- (1) 『今昔物語集』
- (2) 『平家物語』
- (3) 『徒然草』
- (4) 『宇治拾遺物語』

- (3) 重要古語
- 心 情緒を解する気持ち。

2

- (1) 『土佐日記』
- (2) 『枕草子』
- (3) 『平家物語』
- (4) 『竹取物語』

- (3) 重要古語
- 豈あにくんや
- || どうして〜ことがあるうか。
- いや、ない。

3

- (1) 『土佐日記』
- (2) 『枕草子』

- (2) 重要古語
- さては || それならば。それでは。

1 傍線部の助動詞の終止形、ここでの活用形、および文法的意味を答えよ。なお文法的意味は、次のア

イから選び。記号で答えよ。(重複使用可)

ア 断定 イ 存在 ウ 伝聞 エ 推定 オ 婉曲

(1) 人々あまた声して来^くなり。国守の御子の太郎君のおはする^はなりけり。

A
B

(2) あまの原ふりさけ見れば春日^{かすが}なる三笠^{みかさ}の山にいでし月かも

A
B

(3) かくてまたあけぬれば、天禄^{てんろく}三年といふめり。

A
B

(4) 「まことにや、この虎の人食^{たねく}ふを、やすく射^やんとは申^{まを}すなる」

A
B

(5) 笛をいとをかしく吹^ふきすまして、(荻^{あや}の葉の家の前を) 過ぎぬなり。

A
B

(6) また聞けば、侍従の大納言の御女亡^なくなり給ひぬなり。

A
B

2 傍線部を現代語訳せよ。

(1) 「この野は、盗人^{たうじん}あなり」

(2) この十五日になん、月の都より、かぐや姫のむかへにまう^{まう}で来^くなる。

(3) 人はみな春に心をよせつめり我のみや見む秋の夜の月

(4) 「これは龍^{たつ}のしわざにこそありけれ」

1

出典

(1) 『宇治拾遺物語』 (2) 『古今和歌集』

(3) 『蜻蛉日記』 (4) 『宇治拾遺物語』

(5) 『更級日記』 (6) 『更級日記』

重要古語

(1) あまた 〓 たくさん

(3) かくて 〓 このように

(5) いと 〓 とても

(6) をかし 〓 趣がある

2

出典

(1) 『伊勢物語』

(3) 『更級日記』

(2) 『竹取物語』

(4) 『竹取物語』

重要古語

(2) まうづ 〓 参る

演習問題 B

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

七月十五日の月に出でて、せちに物思へる気色なり^①。近く使はるる人々、竹取の翁^{おきな}に告げていはく、「かぐや姫の、例も月をあはれがり給へども、このごろとなりては、ただことにも待らざめり^②。いみじくおぼし嘆く事あるべし。よくよく見たてまつらせ給へ」と言ふを聞きて、かぐや姫に言ふやう、「なんでう心地すれば、かく物を思ひたるさまにて、月を見たまふぞ。うましき世に」と言ふ。かぐや姫、「見れば^③、世間心ぼそくあはれに侍る。なでう、物をか嘆き待べき」と言ふ。

かぐや姫のある所に至りて見れば、なを物思へる気色なり。これを見て、「あが仏、何事思ひたまふぞ。おぼすらんこと、何事ぞ」と言へば、「思ふこともなし。物なむ心ほそくおほゆる」と言へば、翁、「月な見給そ。これを見給へば、物おぼす気色はあるぞ」と言へば、「いかで、月を見ではあらん」とて、猶^{なほ}、月出づれば、出でゐつつ嘆き思へり。夕やみには、物思はぬ気色也。月の程に成ぬれば、猶、時々はうち嘆きなどす。これを、使ふものども、「なほ、物おぼす事あるべし」とささやけど、親をはじめて、何ごととも知らず。

〔竹取物語〕

(注) ○あが仏 || 私の大切な方。 ○夕やみ || 月の出の遅い頃の、月の出ていない夕方。

問一 傍線部①・④の助動詞の文法的意味を答えよ。

① _____
④ _____

問二 傍線部②「ざめり」を、音便を使わない形に書き改めよ。

問三 傍線部③「聞きて」の主体は誰か。本文中の言葉で答えよ。

問四 傍線部⑤「見れば」とあるが、何を「見る」のか。本文中の言葉で答えよ。

問五 傍線部⑥を現代語訳せよ。

重要古語

せちに || ひどく。
例も || いつも。
いみじく || ひどく。
なんでう || どんな。
うまし || 何の不足もない。
な〜そ || 〜してはいけない。
猶 || やはり。
いかで || どうして。
おぼす || お思いになる。